

「子どもをとりまく状況と図書館の役割」

- 1 子どもは大人の鏡。すなわち、子どもが置かれている状況は大人の置かれている状況の反映である。裏返せば、子どもにとって問題であることは、大人にとっても問題であることが多い。
- 2 子どもは親の背中を見て育つことが多い。その結果、親の行動様式を模倣して取り入れる場合と、親を反面教師として育つ場合があるが、ややもすれば模倣している。
- 3 図書館利用に障害のある人へのサービスがそうであるのと同じように、児童図書館サービスは特殊なサービスではない。

1 子どもたちの今を知る

(1) 子どもたちの現実

子どもたちの手のおきどころ

『先進国における子どもの幸せ』(ユニセフ・イノチェンティ研究所、国立教育政策研究所、2010) https://www.nier.go.jp/04_kenkyu_annai/pdf/UnicefChildReport.pdf

『授乳時のケータイで子どもは壊れる』(正司昌子、KKベストセラーズ、2007)

『子どもたちはなぜ、9歳で成長が止まるのか』(三沢直子、実業之日本社、2004)

『21世紀出生児縦断調査 第9回』厚生統計協会、2012

(2) 子育ての危機・育ちの危機

「消えた子どもたち 貧困日本の居所不明児を追う」『AERA』2012年5月12日号

文科省調査 居所不明児 1191人

『ルポ子どもの無縁社会』(石川結貴、中央公論新社、2011)

『完璧志向が子どもをつぶす』(原田正文、筑摩書房、2008)

『モバイル社会を生きる子どもたち 「ケータイ」世代の教育と子育て』(近藤昭一、時事通信出版局、2011)

子どもたちの貧困

『子どもの最貧国・日本』(山野良一、光文社、2008)

消費に踊らされる子どもたち

『子どもを狙え!』(ジュリエット・B・シヨア、アスペクト、2005)

(3) 子どもと電子メディア

乳児とメディア

小児科医の会の提言 谷村雅子氏の研究

* * * * *

『子どもとメディア』の問題に対する提言 「子どもとメディア」対策委員会 2004.2.6

わが国でテレビ放送が開始されてから 50 年が経過しました。メディアの各種機器とシステムは、急速な勢いで発達し普及しています。今や国民の 6 割がパソコンや携帯電話を使い、わが国も本格的なネット社会に突入しました。今後、デジタル技術の進歩はこのネット社会をますます複雑化し、人類はこの中で生活を営む時代に進みつつあります。これからもメディアは発達し多様化して、そのメディアとの長時間に及ぶ接触はいまだかつて人類が経験したことのないものとなり、心身の発達過程にある子どもへの影響が懸念されています。日本小児科医会の「子どもとメディア」対策委員会では、子どもに関係するすべての人々に、現代の子どもとメディアの問題を提起します。

ここで述べるメディアとはテレビ、ビデオ、テレビゲーム、携帯用ゲーム、インターネット、携帯電話などを意味します。特に、乳児や幼児期ではテレビやビデオ、学童期ではそれに加えてテレビゲームや携帯用ゲーム、思春期以降ではインターネットや携帯電話が問題となります。

提言

影響の一つめは、テレビ、ビデオ視聴を含むメディア接触の低年齢化、長時間化です。乳幼児期の子どもは、身近な人とのかかわりあい、そして遊びなどの実体験を重ねることによって、人間関係を築き、心と身体を成長させます。ところが乳児期からのメディア漬けの生活では、外遊びの機会を奪い、人とのかかわり体験の不足を招きます。実際、運動不足、睡眠不足そしてコミュニケーション能力の低下などを生じさせ、その結果、心身の発達の遅れや歪みが生じた事例が臨床の場から報告されています。このようなメディアの弊害は、ごく一部の影響を受けやすい個々の子どもの問題としてではなく、メディアが子ども全体に及ぼす影響の甚大さの警鐘と私たちはとらえています。特に象徴機能が未熟な 2 歳以下の子どもや、発達に問題のある子どものテレビ画面への早期接触や長時間化は、親子が顔をあわせ一緒に遊ぶ時間を奪い、言葉や心の発達を妨げます。

影響の二つめはメディアの内容です。メディアで流される情報は成長期の子どもに直接的な影響をもたらします。幼児期からの暴力映像への長時間接触が、後年の暴力的行動や事件に関係していることは、すでに明らかにされている事実です。メディアによって与えられる情報の質、その影響を問う必要があります。その一方でメディアを活用し、批判的な見方を含めて読み解き力（メディアリテラシー）を育てることが重要です。

私たち小児科医は、メディアによる子どもへの影響の重要性を認識し、メディア接触が日本の子どもたちの成長に及ぼす影響に配慮することの緊急性、必要性を強く社会にアピールします。そして子どもとメディアのより良い関係を作り出すために、子どもとメディアに関する以下の具体的提言を呈示します。

具体的提言

1. 2 歳までのテレビ・ビデオ視聴は控えましょう。
2. 授乳中、食事時のテレビ・ビデオの視聴は止めましょう。
3. すべてのメディアへ接触する総時間を制限することが重要です。1 日 2 時間までを目安と考えます。テレビゲームは 1 日 30 分までを目安と考えます。
4. 子ども部屋にはテレビ、ビデオ、パーソナルコンピューターを置かないようにしましょう。
5. 保護者と子どもでメディアを上手に利用するルールをつくりましょう。

『いま、子どもたちがあぶない！』

（斎藤惇夫、田澤雄作、脇明子、中村征子、山田真理子、古今社、2006）

『テレビに子育てをまかせていませんか？』（コモ編集部編、主婦の友社、2004）

『子どもの脳の発達 臨界期・敏感期』(榊原洋一、講談社(講談社+新書)、2004)
幼児期から学童期

『コンピュータが連れてきた子どもたち』(戸塚滝登、小学館、2005)
そして

『ネトゲ廃人』(芦崎治、リーダーズノート、2009)

「安眠を蝕む「青色光」に気をつけろ！」『週刊朝日』2012年8月17-24日号

(4) ファンタジーはあまねく

ファンタジーの隆盛の意味、現実と非現実

ゲームとファンタジー

『魔法ファンタジーの世界』(脇明子、岩波書店、2006)

「団塊ジュニアはなぜファンタジーにはまるのか」(荷宮和子、新書館、2004、『大航海』No.49、
特集 ファンタジーと現代)

(5) 本を読まない大人、マスコミに踊らされる大人

『虚構の世界における男と攻撃性(増補改訂版)』(原忠彦、新思索社、1985)

『テレビジョンカルチャー』(J.フィスク、梓出版社、1996)

2 子どもたちの昔から考える

子どもとは何者か

『世界子どもの歴史 3 中世』(阿部謹也、第一法規、1984)

Jacques Stella “Games & Pastimes of Childhood” 1657年発行の子どもの遊びの本

『変貌する子ども世界 子どもパワーの光と影』(本田和子、中央公論新社、1999)

『子ども100年のエポック』(本田和子、フレーベル館、2000)

3 子どもにとっての読書の意義

言葉とイメージと思考の関係

感情のコントロール

経験の蓄積

「子どもの本の可能性 (1)、(2)」(坂部豪、『みんなの図書館』2011年12月号、2012
年1月号、図書館問題研究会)

文化の力

『新平等社会』(山田昌弘、文藝春秋、2006)

『14歳の子をもつ親たちへ』(内田樹、名越康文、新潮社、2005)

『読む力は生きる力』(脇明子、岩波書店、2005)

閑話休題 私にとってのテレビと読書(時間があれば)

4 図書館のできるこゝと、あるいは果たすべき役割

子どもたちの何を願うのか

『図書館をめざすもの』（竹内慈編・訳、日本図書館協会、）

(1) 子どもたちの発達の基礎を作る

(2) メディア・リテラシーの確立

大人もメディアづけになっている

映像は情報量が多いので、嘘をみぬきにくい。だまされやすい。信じやすい。自分が直接経験しているのだから、間違いないと思しやすい。

今のメディアの特徴

視覚優位

目立つものが attractive 好まれる 新書の背文字

手軽なものが好まれる

多いものに同調しやすい

共通幻想、個別性の捨象

(3) 子どもと同じ目線で話す

(4) それぞれの年代での図書館の役割

5 子どもたちの読書を豊かにするための戦略

(1) 子ども読書活動の推進

(2) 行政内部の連携・市民との連携「つなぐ」

図書館内部での連携

(3) 図書館員の説明責任

読書への確信を育てる

(4) プロであることをめざす

資料を知り、子どもを知り、児童書のコレクションを作る。そして、地域社会を知り、子どもと本とを結びつける。また、出版の現状を知り、子どもの文化を知る。